

論文

# 家族関係はどのように意味づけられるのか？

——高齢の元受刑者の女性の語りに着目して——

竹 松 未結希\*

## 1. はじめに

高齢者犯罪をとりまく問題点として、「家族からの孤立」「近隣からの孤立」「行政からの孤立」といった社会的孤立が指摘されている（太田 2016:55）。そのなかでも女性の高齢受刑者に目を向けると、高齢者全体と異なる問題点が指摘されている。たとえば、成人の女性受刑者の過去の被暴力経験による犯罪への影響（佐々木 2016）や、ジェンダー規範の呪縛から逃れるための犯罪（後藤 2022）といった、抑圧的なジェンダー構造が密接に関わっている。高齢受刑者の実像と生活意識を調査した細井によれば、「高齢女子受刑者は、『家族』に始まり『家族』に終わり、『家族』抜きには考えられない」ことを指摘する。そのうえで、「それだけに、家族との関係をどのように整理し、修復できるかが、最も重要であると思われる」と述べる（細井 2021:296）。つまり、受刑前の生活から出所後の生活において、女性の高齢受刑者にとって家族は重要な意味づけがなされている。

しかしながら、本稿でとりあげるさよこさんのケースをみると、先行研究と同様に家族に対する切実な思いを抱いているものの、かならずしも家族関係の修復を最重要視しているわけではないことがうかがえる。また、先行研究では、受刑前から出所後の各段階において、女性の高齢受刑者にとっての家族に対する意味づけがどのようにされているのかは明らかとなっていない。こうした関心や問題意識のもと、本稿は、高齢の元受刑者の女性の受刑前から出所後の家族関係にかんする語りをもとに、どのように家族が意味づけられているのかを明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

本研究の分析対象となるデータは、更生保護施設 A で実施したインタビュー調査にもとづいている。更生保護施設は、「矯正施設から出所・出院した人や保護観察中の人で、身寄りがなく、帰るべき住居がないことや、現在住んでいるところでは更生が妨げられるおそれがあるなどの理由で、直ちに自立更生することが困難な人に対して、一定期間、宿泊場所や食事を提供する民間の施設」（法務省）である。衣食住の提供にくわえて、「就労指導や社会適応のために必要な生活指導を行うことで、その円滑な社会復帰を図る」（原 2021:246）目的もあわせ持っている。令和 5 年 4 月 1 日現在、全国に 102 施設（男性の施設 87、女性の施設 7 及び男女施設 8）の更生保護施設が運営されており（法務省）、このうち本研究の調査地である更生保護施設 A は、全体のなかでも女性を対象とした数少ない施設である。筆者は、2021 年 11 月から更生保護施設 A の職員として勤めており、更生保護施設 A の協力のもと、施設在所者／退所者へのインタビュー調査を実施している。

今回とりあげるケースは、窃盗を繰り返すことによって受刑に至った、さよこさん（70 代）の生活史である。インタビュー調査<sup>1</sup>では、受刑前から受刑中、更生保護施設 A 在所に至るまでの生活史の聞き取りをおこなった。更

---

キーワード：受刑経験、女性受刑者、高齢者

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2019年度入学 公共領域

生保護施設に在所する人びとの多くは、「再犯しないように彼らを支援してくれる身近な人が社会内にいない」（藤野 2020:12）という事情を抱えている。さよこさんもまた、身近に頼れる人がいないなど、さまざまな経緯を経て更生保護施設 A で保護観察期間を過ごすこととなった。ただ、他府県で暮らす家族とは定期的に連絡を取りあっており、身近な人との関係性を完全に断っている様子ではなかった。本稿でさよこさんの生活史をとりあげる理由は、受刑前・受刑中・出所後の更生保護施設 A 在所中の各段階において、家族とのエピソードがたびたび語られたためである。

以下では、さよこさんの受刑前から更生保護施設 A 在所中の語りに着目する。

### 3. 受刑前の生活史

#### 3.1 親からの「キャベツとってきて」

本節では、さよこさんの刑務所受刑前までの生活史をたどりながら、家族関係について見ていく。以下の語りは、さよこさんが初めて窃盗をしたときのエピソードである。

さよこさん：1年生前後の子がひょっとしてキャベツ取っても、よその子だから「こら！何やってる！」で終わっちゃうわけよ。大きい人が中学校ぐらいのとなったら、「お前なんだ！」ってことになるけど、三つ四つの子だったら畑間違えたで終わっちゃう。（略）こっちは知らないで持って帰れば親が喜ぶから、よそのだという事は知っておりながら、持って帰れば親が喜ぶから、嬉しいわねそりゃね。もらってきたよみたいな感じで、「とってきたよ」いうよりも、もう半分は「もらってきた」ような感覚だよな。<sup>2</sup>

戦後の混乱期のなか8人兄弟の5女として地方都市に生まれたさよこさんは、あまり裕福ではない家庭環境のもと育った。さよこさんがはじめて物を盗ったのは、記憶の限りだと、小学校入学前だったと言う。きっかけは、お母さんに言われた「キャベツとってきて」だった。万引き行為は、幼少期に限定されるものではなく、さよこさんが成長してからも続いたと言う。窃盗がはじめて警察沙汰になったのは、20歳頃のことだった。

#### 3.2 結婚、報復・抵抗としての万引き、離婚

中学卒業後、さよこさんは八百屋や地元大手企業の事務など、さまざまな仕事を経験する。のちに上京し、そこで知り合った男性と結婚した。結婚後、さよこさんは3人の子どもを産み育てた。家庭生活を送るなかで、夫からのたび重なる暴力や浮気が原因で、さよこさんが30代のときに離婚した。以下は、夫との離婚を決意するまでを示す語りである。

さよこさん：もうむかついてむかついて親父に万引きしたものを食わせて、これでも食っとけ！じゃないけどそれでイラついて、そんなことから、だんだんと覚えてきたというか。

調査者：なんかこう、お金が、あったけど、物をとっていたってのはやっぱ旦那さんに仕返しをするために？

さよこさん：そう、そう、そういうところが多分あったと思う。（略）もうね、腹立つと思うけどね。子供小さかったからね、そんなおいては逃げたくなかったし。（略）もう何でも絶対に絶対服従みたいにしてたから、子供が見ても目に余ってたんだよね。「（長女が）私達のためにそんな我慢することない」って言ったから、なんかブツと切れちゃってねこっちが。<sup>3</sup>

夫からの暴力のさなか、さよこさんは、仕返しするために、万引きした食料品を夫に食べさせることをしていた。レイチェル・シュタイアは、万引き犯は「もやもやする願望や、判然としがたい欲求の闇から抜けだそうとして盗みをする。ある者は悲しみを癒すために、ある者は権力に対する反抗や社会への報復」（Rachel 2011=2012:14）として、窃盗行為に及ぶことを見出す。さよこさんの語りに照らし合わせてみれば、この当時の万引き行為は、さよこさんにとって、家族に暴力をふるう夫への抵抗を示していたことがうかがえる。「ブツと切れちゃってねこっちが。」と語るように、長女の一言で夫との離婚を決意した。さよこさんは、離婚後、3人の子どもを引きとり、生ま

れ育った地方都市で再び生活することになった。地元にもどってからは、実家の近くのアパートを借りて、子どもたちと一緒に生活した。さよこさんは、スーパーやスナックなど複数の仕事を掛け持ちして忙しく働きながら、シングルマザーとして3人の子どもを育てた。

仕事に励み、だんだんと貯金額が増えてきたさよこさんは、40代のとき、働いていたスナックの経営を譲り受けて、オーナーになった。「それで自分でやって10年やったかな。言えば、やっぱその10年間が一番面白かったね、これ40から50までだったからね。」<sup>4</sup>と、スナックで働いていた40代から50代までが人生で一番楽しい時期だったという。さらに、ちょうどそのころ、スナックを開業する前のアルバイト先で知り合った男性を用心棒として雇い、交際を始めた。男性に教えてもらったことがきっかけで、休日に競艇や競馬などといったギャンブルにのめり込んだと言う。しかし、男性のさまざまな金銭トラブルが明るみになるようになったことが原因で、離別した。その後、50歳のときに経営していたスナックを閉店した。その時期に、現在の内縁の夫と出会った。地元に戻って生活をしているあいだ、さよこさんは、物を盗ることは無かったと話す。

その後、長男が建てた戸建て住宅で長男の家族と同居生活を送ることになるが、しばらくたって長男が病死してしまう。このあたりでのさよこさんの生活史は不明瞭な点が多いが、万引きを再開してからは、警察に捕まったり、留置場に入ったりして、そのたびに、娘や孫娘に引き取りに来てもらっていた。当時のことを「その前は手ついて謝っただけだ。2人があぐらかいてね。女だてらに。いつもあぐらかかかない子だったんだけど。そんなのにまたやっちゃったから、今度こそ謝っても謝りきれないし…」<sup>5</sup>「今までは家におれたぶんだけね。罪は許して貰えたわけじゃないけど、やっぱりまだ、まだ、回数が少ないから許されてみたい。」<sup>6</sup>と、振り返る。そして、同様のことを何度か繰り返したのち、刑務所で受刑するに至った。

## 4. 受刑経験について

### 4.1 断続的な家族とのやりとり

さよこさんの受刑が決まった時点で、つながりのあった家族は、長女・次女・次女の子2人、長男の子2人であり、さよこさんの語りによれば、この6人の親族だけが自身の受刑を知っているという。以下では、さよこさんの受刑を知るこれらの親族に関する語りに注目する。

受刑しているあいだは主に、次女との定期的なやり取りがあった。さよこさんから手紙を送って差し入れをお願いしたり、次女から短文のメッセージとともに差し入れをお願いしていた眼鏡が送られてきたりした。さよこさんは、受刑中の家族とのかかわりについてのエピソードを、以下のように語っている。

調査者：ご家族と、【刑務所】<sup>7</sup>入られる前と、入った後と、今で、こう、関係性というか、そういうのって変化はありました？

さよこさん：変化はあるしでも、まあ、下のね、次女だけは、あの、面倒見ててくれて、だんだんと最初はもう本当に、カンカンに怒っちゃってたけど、徐々に、なんとなく、収まっていったというかですね、あの、怒りもおさまって、いろんなこと心配して手紙にも書いてくれてですね、まあ、今回だけで終わりにしてねって、メモみたいなも入ったりして来てたんですけど。

報告者：【刑務所】に入ってた時に？

さよこさん：そうそう。眼鏡を頼んだ時にもね、そういうときに、メモも入ってて。(略)だから、ああ、だんだんと雪解けじゃないけど、そうやってちょっとね、書いてくれるだけいいなあ、自分の中ではいいなあと思ってるけど。<sup>8</sup>

家族との関係性は、さよこさんが受刑中においても継続されていた。主にやり取りがあったのは次女だといい、刑務所に差し入れや手紙を送ってくれていた。こうした次女の反応を受けて、さよこさんは「だんだんと雪解けじゃないけど」と語り、以前と比較して、次女との関係性が改善していることを感じ取っていたことがうかがえる。

刑務所を出所する段階に入ると、出所後の引受人を選択しなければならない。さよこさんは当初、出所後の帰宅

先の候補として家族を想定していた。

調査者：(刑務所出所後に) ご家族のところに帰ろうと思わなかったんですか？

さよこさん：それはもう、家族と言っても、その長女の方は、やっぱり旦那さんももちろんみえるし、遠いし、その頃にまだお母さんという人も隣同士で住んでるんですよ向こうは。(略) 私がこういうふうになったときに、まだお母さんが元気でいうかとりあえず生きてみえたからね、そんなね、話もされないし。(略) だけど、とてもじゃないけど、【長女】<sup>9</sup>に世話になるってということもないし、それに【次女】<sup>10</sup>の旦那さんが、ちょっと名前忘れちゃったんだけど。(略) もう施設に入ったりして(略) だからもう全然それ以上の負担がかかるから、娘にそういう話をしたら娘も【さよこさんの地元】の方に弁護士さんじゃないだろうけど、そういうところに行って聞いたら、6ヶ月なら6ヶ月同居するとか、それで月に1回かなんかはほら、観察所に顔を出さなくちゃいけないとか。(略) 人にね代わってとかそういうことも言えないし、自由が利かないから、「身元引受にはなれないからね」って言ってポンと言われたから。

調査者：ああ、【次女】さんから？

さよこさん：そうそうそう。だから満期でいいやと思ってたんですよ、私は。はっきり言ってそんな嫌いじゃなかったし刑務所自体がね、だから満期でもいいか。いいわーってこのまんまでって思ってたなら、そしたら、こういうところが、観察所があって、だから結構、この【施設A】に世話になったっていう人と(刑務所で)席が隣同士になってね(笑)。その人がいろいろ教えてくれたんですよ。<sup>11</sup>

結果的に、さよこさんは、長女と次女の引き受けを得ることはなかった。自発的に引き受けを頼まなかったのか、それとも引き受けを頼んだものの了解が得られなかったのかは定かではない。そこからさよこさんは、「だから満期でいいやと思ってたんですよ、私は。」と語るように、仮釈放を受けずに刑務所を満期出所するつもりでいた。受刑中において、主にやり取りがあったのは次女だというのが、関係性が徐々に改善していくのを感じ取りつつも、仮釈放時の引き受けを了承するとは限らない。しかし、繰り返しになるが、家族との関係性は断絶されているわけでもなく、曖昧なつながりが維持されている。満期出所をするつもりでいたさよこさんは、偶然にも更生保護施設Aに在所経験のある他受刑者と知り合い、施設Aの存在を知った。そこから、施設Aへの帰住の選択と仮釈放期間を過ごすこととなった。

上記の出所後の引受先をめぐるさよこさんの語りの中で注目したいのは、「はっきり言ってそんな嫌いじゃなかったし刑務所自体がね」とも語っていることだ。こうした語りは、インタビュー中にたびたび語られた。

#### 4.2 受刑生活の肯定的な解釈

調査者：(受刑生活は) すごく大変だった刑務所で？

さよこさん：いや、それがですね、私ね、もう思ってたより全然大変じゃなくて、もう全然きつくないんですよ。うーん、想像してたのと自分では全然違って。その、今までとか映画とかね、ニュースとかそういうことでしか、実際には知らなくて刑務所に行った人と話もしたことないし。(略) だから自分が来て、相当にやっぱり怖かった。自分の中では。そしたらその、思ってたよりも全然怖くなくて、やっぱり規律があって、自由にならない、縛られる私にとってはすごく良かったですね。(略) 私は窃盗だったから、1人になるとそういう気が起きたり、よからぬ考えがなんか体の中から湧き出るようですねということになると、うん、そういうことを思ってもできないというのか、全然そういうことを思わずに済むから、すごく自分的には楽だったんですよ。<sup>12</sup>

筆者が受刑生活についてたずねると、さよこさんは、「思ってたより全然大変じゃなくて」と言う。そしてその理由を、刑務所の規律によって自由がないがゆえに、窃盗について「思ってもできない」「全然そういうことを思わずに済む」からだという。

さよこさん：やっぱり、行ってよかったなって思うんですよ。

調査者：刑務所に？

さよこさん：うん。私が行って、私がやったことは刑務所の中のことは、別に嫌いなことは何一つなかったから。管理をしてもらって、私嫌いじゃなかったからいいんだけど。私がよくたって、周りの者がね、もうそのことはわからないし、刑務所って言葉だけでもね、びっくりするようなことだから。だから、もう本当に……周りのそういうね、子どもとかにね、そういう者に対してね、やっぱりすっごい悪い気がしますよね。だからそのためにも、いかなあ……私一人だったら、ひよっとしたらね、一人だったら食事も出て来るし、まあいいかって、ひよっとしたら安易な気持ちでおるかもしれんけど。やっぱりそんなわけにはいかないし。「また？」って言ってね。もう今度こそもう知らんだわね。死んでも引き取らんって感じかもしれないから。そこになる前に、やっぱり、やめなあかんし。<sup>13</sup>

この語りでもまた、さよこさんは、「刑務所の中のことは、別に嫌いなことは何一つなかったから。管理をもらって、私嫌いじゃなかったからいいんだけど。」と述べている。先の語りと同様に、規律や自由の制限によって窃盗をすることがない／できないという考えに由来する語りだと解釈できる。しかしながらさよこさんは、刑務所への肯定的な意味づけにくわえて、「周りのそういうね、子どもとかにね（略）やっぱりすっごい悪い気がしますよね。」「「また？」って言ってね。もう今度こそもう知らんだわね。（略）そこになる前に、やっぱり、やめなあかんし。」とも語っている。さよこさんは、刑務所生活そのものへの抵抗感はさほどなく、むしろ「窃盗」行為を回避できるので、刑務所生活を肯定的に意味づけている。しかし、いくらさよこさんが刑務所生活に肯定的な意味づけを見出したとしても、さよこさんが再び刑務所に入るということは、再犯をするということであり、家族との関係性が現状よりも悪化することを意味する。こうした葛藤は、なぜ生じているのだろうか。

ここまで、さよこさんの受刑前・受刑中の生活史を家族関係にもとづいて分析した。つづいて、刑務所を仮釈放で出所したあとの施設 A での生活、施設 A 退所後の生活の展望について着目する。

## 5 施設 A 在所中のいくつかの揺らぎ

更生保護施設 A 在所中においても、さよこさんと家族のやり取りは続いていた。保護観察による遵守事項<sup>14</sup>や更生保護施設 A の寮則<sup>15</sup>といった一定の制約はあるものの、受刑中とは異なり、比較的自由的な行動ができる環境へと移行した。本節では、さよこさんの施設 A での生活と施設 A 退所を見据えた語りに着目する。

### 5.1 いくつかの揺らぎ——自分でも予測できない再犯の可能性

さよこさん：だから今ここでもやっぱり自由に出入りしてですね、物を買ってきたりなんかしてるけど、そういう気が起こらないわけでもないけど、起きたら怖いなと思って、なんかいつもドキドキする。それを抑えるのに必死っていうかですね、ああ、前はこういうときにこういう気が起きたんだよなと思うことがある。うん。（略）それをもういかに抑えるかが、まあ、戦いみたいな、自分との戦いみたいなね。だからあんまり買い物には行きたくないですね。<sup>16</sup>

先に述べたように、保護観察による遵守事項や更生保護施設 A の寮則といった一定の制約はあるものの、さよこさんは、受刑中とは異なり、比較的自由的な行動ができる環境へと移行した。施設 A での生活を送るなかでさよこさんは、「そういう気が起こらないわけでもないけど」「それを抑えるのに必死」と、窃盗に対する不安を語り、さらに「それをもういかに抑えるかが、まあ、戦いみたいな」「だからあんまり買い物には行きたくないですね。」と、自身のなかで沸き上がる窃盗への欲求に抗おうとしていることがうかがえる。こうした物を盗りたいという欲求への抗いは、以下の語りにもみられる。

さよこさん：「良いさよこ」がいて、その中の一部、ちっちゃいね、その「さよこの分身」みたいなのが私の中に住んで、そいつがバサバサ悪さをする。時々頭をもたげてくるから、1人うち自分の中にね、ちっちゃいのを飼ってるような気がするっていうような話をしたんですよ。それを私が、その子を叱る、「コラ！」っていうような感じで、それで違う子供を自分がここの中で育ててるような、そいつを怒るような気持ちで。(略) そういう気持ちがね、湧いてきたときに、頭こっついて「コラ！」って言って、怒ってやるような。(略) だから、こっちだけね、殺してやるとかさ、殺せばいいんだけど。やっぱりそうはいかないみたいだから、「ちょっといかんぞ」みたいな感じでね、怒ってやって収まればいいんだけど。そうじゃなくなったときにやっぱり怖い。いつも思ってる、いつも思ってますよそれは。<sup>17</sup>

さよこさんは、物を盗りたいという欲求への抗いは、自身の中に住んでいる「バサバサと悪さをする」「さよこの分身」に起因するのだという。「さよこの分身」を「殺せば」いいのかもしれないが、そうはいかない。そのためさよこさんは、物を盗りたいという欲求が生じたときは、「さよこの分身」を「コラ！というように感じて」怒ってなだめようとする。しかし、「そうじゃなくなったときにやっぱり怖い」と、さよこさんが「さよこの分身」をコントロールできなくなったときのことを不安に感じている。

## 5.2 いくつかの揺らぎ——自分が発端となった家族たちのトラブル

こうした再犯への不安や葛藤を抱いていたさよこさんだが、以下の語りのように、家族にまつわる心境の揺らぎもあった。

さよこさん：それで私のことできょうだい仲たがいがしたみたいで。ここにきてから、久しぶりにお姉ちゃんとしゃべって、最初はぎこちなかったけど、普通にしゃべれたって、もうごめんねとか言って、私も言ってたんですけどね。(略) きょうだいだったらちょっとケンカしたみたいな感じでね。それ以来、何カ月も喋ってなかったなんて言ってたから。ああ、私の為にそういうこともなるわなって、お互いにイライラしてるからね。かといって、誰にもそのことをね、こんなことで、きょうだいげんか、気まずいんだわねって、話もされずにね。子供にも喋れもされず。だから、そういうことを思うと、本当に他のことでね、罪を犯したけど、そういうことのほうが、もっと罪深い。うん。きょうだいまでね、仲たがいさせて、本当はもう、おさまっているか、自分たちのことじゃなくって、最もは私のことだから。だからまあ、そっちはそれでおさまったからよかったなって思ってるんだけど。……まあ……恩を返すじゃないけどね、返す、返さないじゃなくって、何もしなければいいんだわね。本当に。ね。何にもしない。うん。このまま、いらんことをやらんでも、良いんだもん、本当に。それが難しいっていうかね……うーん。<sup>18</sup>

さよこさんは、次女を中心としたやり取りが行われるなかで、ある日、長女と次女が喧嘩していたことを知る。筆者がインタビューを実施した時点では、長女と次女は和解したと語っていた。だが、娘同士の仲違いがおさまったとしても、さよこさんの心境は複雑なままである。なぜなら、「それで私のことできょうだい仲たがいがしたみたいで。」と語っているように、さよこさんは自身のこれまでの経緯が娘同士の喧嘩の原因なのだと、自責の念に駆られているからだ。そのことを「罪を犯したけど、そういうことのほうが、もっと罪深い」と語っている。そして、娘たちに恩を返す・返さないではなく、「何もしなければいいんだわね。」「このまま、いらんことをやらんでも、良いんだもん」「それが難しいっていうかね……」と、自身の物を盗りたいという欲求への抗いと関連付けて語っている。このように、施設Aで生活していくなかでも、さよこさんの分身や家族たちのトラブルといったいくつかの揺らぎが生じた。

## 6 施設 A 退所後の生活を見据えて

### 6.1 身近にいる家族や他者に買い物をゆだねる

本節では、施設 A 退所後の生活を見据えたさよこさんの語りに注目する。

さよこさん：娘たちと買い物に行っても絶対そういうことはないんだけど、1人っていうのはいかんだろうねやっぱね。だから今回でも、もし帰ってもお弁当も取るし、買い物は知り合いが行ってるような、すぐ近くのところでは、全然そういう気が起こらないところにしか行かないようにするって自分で思ってるし、月に1回ぐらいは娘に来てもらって、それでちょっと普段買えないようなものを買うなら、その娘と一緒に買いに行くとか、そういうような計画は自分ではしているんですけどね。だから、よっぽど本当にしっかりして、ね、心改めてと言うか、うーんと思うと、最近ちょっと動揺してるね、なんとなく。気持ち的に、本当にそれが実現できるだろうかとか。

調査者：それはちょっと揺らぎ始めてるのかな？

さよこさん：まあ、ここだったら絶対にそういうことないと思ってる、できないというか、しないって思ってるけど、これが自分のうちに帰ったときに、縛られるものがないから、本当に気持ち的なものだから、どこまで自分でこの気持ちっていうのが持続するかどうか。うん。怪しいかなとかですね、それが怖い。

調査者：怖いよね。

さよこさん：うん、怖い。縛られるものがないから。だから今、前にお話したみたいに、孫の友達のお母さんと子どもが住んでるんだったら、そのまんま一緒におってもらってもいいかなと思うぐらい。それでその人が、【地元の手スーパー】<sup>19</sup> 勤めてみえるらしいから、お願いして買ってきてもらってもいいもんね。同居してるなら、今日これとこれと、帰りに買ってきてって言うなら、向こうも多分嫌とは言われないうからね。それもいいから、一緒におってもいいかなって話は娘には言ったことあるんですよ。その返事はまだ聞いてないけど。まあ、無理して何かお母さんが帰ってくるまでには、家を見つけて出てくつもりではおるって話は聞いてるよって言うから、そんな無理して出てかなくても、私もうちに1人ではちょっと寂しいから、全く別々でいいんだけど、おるってだけでいいから。あれだねって、おってもらっても別に私は構わないよって言ったんですよ。<sup>20</sup>

上記の語りでは、3つの立場の人びとが登場する。はじめに、「全然そういう気が起こらないところ」つまり、知り合いがいるような近所のお店で買い物をすることで、物を盗らない環境に身を置こうとしている。つづいて、「月に1回ぐらいは娘に来てもらって」買い物に連れて行ってもらい、普段変えないような物を買う。しかし、「本当にそれが実現できるだろうか」と語っているように、先に述べた計画が実行できるかはわからない。そこでさよこさんは、事情があってさよこさんの自宅に居候する、孫娘の友人親子に言及している。具体的には、「その人が、【地元の手スーパー】勤めてみえるらしいから、お願いして買ってきてもらってもいいもんね。」と語っている。このように、さよこさんは、物を盗らないためのいくつかの対処法を計画していることがうかがえる。

### 6.2 生活保護の活用と民生委員とつながっておく

しかしながら、物を盗るといふ不安だけではなく、施設 A 退所後の生活には経済的な不安も関わってくるだろう。

さよこさん：やっぱり、ちょっと相談というかですね、話ができる人を作ろうとは思ってます。いろんな相談でね。あの、民生委員がまた同じ町内にみえるんですよ、離れてるといいんだけど。やっぱりこのね、【刑務所】でっていうことを知られてもいいんですよ民生委員の人に。知られた方がいい。何となくね、見えない鎖で縛られてたら私は、何となくそういう気がしてるんですよ本当は。縛られてた方が、いつも見張られてるから、そういう気が起きてもできない、やれない、そんなような気がせんでもないんだけど、同じご町内っていうのは非常に嫌なんだわね。

調査者：めっちゃ近所なんだ。

さよこさん：同じ町内でちょっと回ったらその先生のところがあるんですよ。そこが民生委員してみえるんですよ。ね。(略) だから何か相談に行ったときに、そこまでやっぱり例えば、生活保護持ち願い出たりしても、結局はそこまで【刑務所】で仕事がないからっていうふうになったときに、ただ、ただの老人で生活に困ってるから、生活保護って話だけになるならいいけどまだしも。いや、【刑務所】に行っただけのことだから、民生委員とかそういう生活保護をかかると言っただけで、その【刑務所】でってことはやっぱり知られたくないんだわね。孫たちのためにね。なんとなくね。(略) だから、その先生に相談じゃなくて、全く別の人の役場の方の関係の人にですね、そのような話をね、聞いてもらえたら、遠くからいつも目を光らせてるから、ちゃんとやりなさいよって言われたり、そういう気持ちもあるんですよ。でもそれを、住むすぐ裏の人に目を光らせてもらってるとちょっとしんどい。あまりにも近すぎて。恥ずかしいっていうのもあるし、だけど。全然遠くからですね、そういう人も言ってこんなふうになったって言ってちゃんと言って、あの相談するのは全然構わないんだけど。それを隣の隣ぐらいの人には知られたくないっていう気持ちはある。(略) 役場のそういうところにですね相談したり、聞いてもらえるだけでも、良いから。<sup>21</sup>

「話ができる人を作ろうとは思ってます。いろんな相談でね。」と語るさよこさんは、地元に戻って独り暮らしをするうえで、民生委員に対して、日常生活の相談だけでなく、自身が「元受刑者」の身であることも打ち明けたいと考えている。しかし、さよこさんの自宅近くには、昔から世話になっている民生委員がおり、「同じご町内っていうのは非常に嫌なんだわね。」と語るように、相談や話ができる人は、民生委員の立場にある人であれば誰でもよいというわけではない。その理由は、「あまりにも近すぎて。恥ずかしいっていうのもある」からだという。そのため、「全く別の人の役場の方の関係の人にですね、そのような話をね、聞いてもらえたら、遠くからいつも目を光らせてるから、ちゃんとやりなさいよって言われたり、そういう気持ちもあるんですよ。」と語っている。

さよこさんの受刑経験が周囲の広範囲に明らかになれば、地元で生活することは困難になるだろう。そのため、さよこさんが誰に対して受刑経験を打ち明ける／打ち明けないのか慎重な姿勢をとるのは当然のことだ。このことは、地元の友人に対しても同様の姿勢を貫いている。

### 6.3 地元の友人

さよこさん：だからもう、頼る人も、もうあとは友達はいるよね。そりゃカラオケの友達もいるし、【友人】<sup>22</sup>さん言う人もいるし。(略) 日曜日のたんびに山に登ったりね、食事に行ったり、ゲームやりに行ったりする。(略) だから私がまさかのまさかだねここにこういうところに来てるなんて、言うても冗談だと思う。いやあ、【刑務所】に行ってたんだわと思っても、もし私が言うとするでしょ。そしたら「また、さよこちゃんそんなこと言って。」言っただけで笑うくらいしか思っていない、絶対に思っていないと思う。

調査者：いつか言おうか思っていますか？

さよこさん：思っていない。どんな嘘つくだったら、絶対一つで、誰にでも同じこと言う。ちょっと病気してたから入院してて、【長女】のところに入院してたからって。(略) 「あ、そうだったんだ。」で終わっちゃうんだね。どうせ人のことだしね、向こうからしてみればね。深くは言わないと思うけど。だから、誰に話をするときがあっても、もうそれで通す。コロコロ変えたらね、どこでどうなるかわかんないし、誰にどんなに言ったかわかんなくなっちゃうから、言うだったらもうそれで統一して、近所でもね、「どうしてたの。」向こうもお上手ってだけでね、だからこんなふうだねってまず、娘たちに「どうやって説明したの？」って聞いてから、両隣の人にね、だからそれで統一していかないと、今の世の中だから、どうせ他人ごとだからね、「あ、そうなんだ。」で終わっちゃうってね、深くね、口では「大変だったね」言っただけで、どこまで心配してる？私もそうだけど隣のことだったら「ああ、そうなんだ」って終わっちゃうもんね。だからそういうことはそんなに心配してないんだけど。<sup>23</sup>



上記の語りのように、地元に戻ったあとのさよこさんは、しばらくやり取りのなかった友人たちとの交流を再開したいと語っている。友人や隣近所には、自身の受刑経験を打ち明けることはせず、娘をはじめとする家族と事前に口裏合わせをし、周囲への説明を統一しようと計画立てている。繰り返しになるが、さよこさんの受刑経験が周囲の広範囲に明らかになれば、地元で生活することは困難になるだろう。しかし、上記の語りのように、受刑経験を打ち明ける／打ち明けないという選択肢はそもそもなく、「どうせ他人ごとだからね」「そういうことはそんなに心配してないんだけど」と語っているように、さよこさんにとって地元の友人との交流の再開は、カラオケや登山、食事といった日常生活のごく一部を占める出来事にすぎない。

その一方で、さよこさんの地元から離れた他府県に暮らす内縁の夫に対しては信頼を寄せている。

#### 6.4 内縁の夫

調査者：\*\*さんって、結婚はしてないけど、内縁の夫みたいなかんじですか？恋人とか彼氏みたいな？

さよこさん：うん、そうそうそうそう。そんな、もう、16年と7カ月一緒に住んでたんですね。夫婦よりは濃いかもかもしれません。（略）掃除にって言って、私店辞めた時に、家に行ってたんだけど。だから、【内縁の夫】<sup>24</sup>のところには、1カ月に1週間ぐらい行って、またこっちに帰ってきて、そこに住んでたから。だから、それから16年、行ったり来たりはしてたけど…（略）

調査者：【内縁の夫】は結婚されてて、さよこさんとも一緒に暮らしてたみたいなの。

さよこさん：そうそうそうそう。

調査者：ごめんなさい、言葉が見つからないですけど、不倫的な感じですか？

さよこさん：まあ、世間的には不倫でしょうね。でもそんなふうな、好きだとか、そりゃ嫌いだったら一緒にならないけど、悪いけどわたし全然愛情は無かったんですね。

調査者：【内縁の夫】に対して？

さよこさん：うん。つとめてるってかんじ。そこに就職したようなかんじ。それもこれもあれも、あの、まとめたの、その、給料をもらってるって感じだったから、特別に、冷たくもされないし、一緒になった時に、愛しとるとか、そういうね、雰囲気、お互いになくなって、お店をやった時に知り合いだけど、とくべつ二人だけでどっかに行くとか、お茶も一杯も飲んだことないし。…（略）

調査者：じゃあ、なんか、今も、その、つながりは続いているけど、夫婦とかそういうものよりは、知り合い？

さよこさん：知り合いだね、ツレって言うか、とくにね、歳と共に、友だちもいるけど、心底こういうことまで知らせてる、打ち明けてなんでも言える人は、あの人だけ。

調査者：親友みたいな感じ？

さよこさん：そうですね。もう、ほんとうに、自分のもし旦那だったら旦那にでも隠すようなことを【内縁の夫】は知ってるみたいな感じだね。言っても、懐が深いというか、なんでも、言っても、受け止めてくれて、うん。「バカなことを言っとんじゃねえわ。」みたいな感じで、怒られた事もないし、手を上げられたこともないし。（略）これからも、そうやって、たまに会えたらいいなとかね。<sup>25</sup>

さよこさんには、地元とは異なる他府県で暮らす内縁の夫がいる。内縁の夫との出会いは、さよこさんが受刑前に営んでいたスナックに客として訪れたことがきっかけだった。50歳頃、スナックの閉店が決まったときに「うちに掃除に来るか？」と内縁の夫に勧誘を受け、家事手伝いとして雇われた。それ以来、付き合いが続いている。内縁の夫は、さよこさんの親族以外のなかでも受刑歴について知っている数少ない人物であり、施設A在所中も定期的に連絡を取り合っていた。

語りのなかでさよこさんは、内縁の夫のことを「悪いけどわたし全然愛情は無かったんですね。」「つとめてるってかんじ。そこに就職したようなかんじ。」といいつつも、「心底こういうことまで知らせてる、打ち明けてなんでも言える人は、あの人だけ。」と、内縁の夫を信頼している。その一方で、内縁の夫とは「これからも、そうやって、たまに会えたらいいなとかね。」と、適度な距離を意識的に保っていることがうかがえる。

内縁の夫にまつわる語りからうかがえるように、さよこさんのこうした信頼や安心感といった情緒的な感情をもつ対象は、動植物といったケアの対象にもあらわれている。

## 6.5 動植物

さよこさん：もうね、猫か何かを飼って、そういう子達に迷惑をかけないように、それを糧にするようなね。大事なものをつくる。今は部屋にあるサボテン、サボテンを家族のように思って。(略) あれやね、植物じゃなくて動物でも飼ってたらもっとね、そう思って、またああいうふうになるからと思って身を引き締めてね、生活できるんじゃないかなと思って、犬とか猫とかもともと好きだから、飼えばね、今度こそ。<sup>26</sup>

さよこさんは、受刑前、自宅で猫や金魚、植物といった動植物を飼っていた。しかし、受刑によって大切に育てていたこれらの動植物を失うこととなった。こうした背景もあり、地元に戻ってからは、「またああいうふうになるからと思って身を引き締めてね」という心持ちで動植物をケア対象とすることで、「迷惑をかけない」ようにしたいと語っている。

こうした動植物をケア対象と見なすさよこさんの語りからうかがえるのは、かならずしもさよこさんにとって、家族がもっとも重要な人物ではないということだ。

調査者：さよこさんにとって、今後生活されていく上で重要な人とか物って何かありますか？

さよこさん：無いね、ぜんぜん。

調査者：ああ、無いんですか。

さよこさん：うん。重要な人？

調査者：物でも人でも、にゃんこでも。

さよこさん：うーん、まあ、一番重要なのは猫だね、悪いけどね。娘はね、また同等ではないんだけど、同等ではないけど、あの子にはあの子の世界があって、やっぱりもうね。もう子供もいることだし、私の自由にはならないけど、猫だったら私の自由になるし、物も言えるし、物も言ってくれるし。大体、見りゃわかるしね、何が言いたいかね。<sup>27</sup>

筆者が「今後生活していく上で重要な人とか物はあるか」と質問したところ、「無いね、ぜんぜん」と語った。そのあと、少し考えながら「うーん、まあ、一番重要なのは猫だね、悪いけどね。」といい「あの子にはあの子の世界があって、やっぱりもうね。もう子供もいることだし」と、ペットと家族を対比させるかたちでペットの重要さと、そうではない家族について語った。その理由を、「(家族は)私の自由にはならないけど、猫だったら私の自由になるし」と、語っている。

それでは、さよこさんにとって家族はどのような位置づけがなされているのだろうか。

## 6.6 家族との今後

さよこさん：とりあえずさ、ほんとうに切羽詰まってきたからね、気持ち的にもさ。まず、家に入るまでがね、敷居が高いよね。かなりね。

調査者：ああ、【地元】<sup>28</sup>のおうち？

さよこさん：うん、そうそうそうそう。(略) とりあえず、敷居は高いですよ。帰るまで。

調査者：いろんな意味で。

さよこさん：いろんな意味でね。そりゃ、もう、新婚さんがハネムーンから帰ってきたのと違うんだからね。「よく帰ってきた」というわけにはいかんからね、やっぱり。……「はあ、どうもどうも」っていう感じでね。まあ、孫たちはいないと思うけど、私の想像ではね。娘二人でやることやったら、「じゃあね、おばあちゃん」って。「も

うおばあちゃんの顔も見なくてもいいわ。」って、「何、もう帰るの？」って言ったら、「うん」って言って、それでもう終わりだと思うけどね。私の予想ではね。だけどこの際、みんなで言うべきことは言わないかんと思ってるかもしれないしね。わかんないけどね。まあ、それはそれなりで、当然だから。私的にはいっぺんに片付くし良いかなと思わんでもないけどね。<sup>29</sup>

上記の語りは、さよこさんが施設Aを退所する当日について語った内容である。さよこさんが施設Aを退所する際、自宅の最寄りの駅まで家族が迎えに来てくれることになっているという。数年ぶりに会う家族についてさよこさんは、「まず、家に入るまでがね、敷居が高いよね。かなりね。」といい、「ハネムーン」という刑務所出所とは対極に位置する例え話をしている。そして、「娘二人でやることやったら、「じゃあね、おばあちゃん」」、「私的にはいっぺんに片付くし良いかなと思わんでもないけどね。」と、なるべくわだかまりのない状態でいたいという考えを抱いていることがうかがえる。このことは、以下のように、さよこさんの今後の生活について語っている場面でも同様のことがうかがえる。

調査者：さよこさんは地元に戻ってから、家族とか近所の人とか、【内縁の夫】も含めて、どのように付き合っていきたいとありますか？

さよこさん：まあ、みなさんには申し訳ないけど、その2年前と、同じように、この2年半が無かったらいいなみたいな。自分の中ではね。忘れるんじゃないで、忘れてもらいたい。

調査者：うん。

さよこさん：私も自分で忘れたいけど、だけど、このできたことは私の中ではもちろん忘れてないけど、だけど、忘れてもらいたい。よく言えばね。それで今まで通りに、うん。<sup>30</sup>

## 6-7. 一番心配なのは自分

さよこさん：出てからのこと、まだ先だけど、もうすぐだもんね。そんなね、何年も先じゃないから。だから、家のことが心配じゃなくて、自分が一番心配だね。自分の中がね、うん。あとはそうね、猫だあれだこれだって、口では言ってるけどそうじゃなくて、何が心配って自分の気持ちが一番。どうなるかね、抑えられるんだろうかね、ひよっとしたら誰もいないならいいって言ってやっちゃって、首尾よく帰ってこれて、それをどう思うか。バレずにもし帰ってきたら、またやっちゃうかもしれないし、そんなのがまた元の木阿弥みたいにわからないわみたい、なっちゃったら嫌だなんて。先の先まで読む。想像したりとかね。<sup>31</sup>

上記の語りは、退所後の生活について語った内容である。語りのなかでさよこさんは、「家のことが心配じゃなくて、自分が一番心配だね」「猫だあれだこれだって、口では言ってるけどそうじゃなくて、何が心配って自分の気持ちが一番」と、これまでの語りを振り返り、一番心配なのは家（家族）や猫のことではなく、自分自身だと語っている。この語りは、これまでさよこさんが繰り返し語っていた、物を盗る・再犯することへの不安がさよこさんにとってどれほど切実なものなのかを示している。それでは、さよこさんにとっての家族あるいは周囲とのとりむすぶ関係性は、さよこさんにとってどのような意味づけがなされているのだろうか。

## 7. 考察と結論

本稿は、高齢の元受刑者の女性の受刑前から出所後の家族関係にかんする語りをもとに、どのように家族が意味づけられているのかを明らかにすることを目的とした。さよこさんは、幼少期から窃盗をするようになり、その後夫の暴力などといった要因が重なり、大人になってからも窃盗は続いていた。受刑前までに、交番や留置所に行くことがあったが、そのたびに家族が迎えに来てくれていた。受刑に至った段階では、家族はさよこさんに向けて怒りをあらわしていたが、次女を中心としたやり取りをするなかで、さよこさんは、家族との関係修復を感じ取って

いた。その後、家族に出所後の引き受けを頼むことはなかったが、更生保護施設 A に入所してからも細々と家族との関係性が継続されていた。語りの中で繰り返しあらわれていたのは、再犯への不安であり、施設 A での日常生活を送るなかでも、再犯への不安や家族同士の仲違いといったことからの心の揺らぎが生じていた。

同時に、さよこさんは、自分の中にいる「さよこさんの分身」をいかにコントロールするかについて苦悩しており、これまで在所していた刑務所の環境は、さよこさんの分身をコントロールする場所として適合すると語っていた。しかしその一方で、再び受刑することによって、家族との関係性がいよいよ断たれるのではないかという不安も抱えていた。施設 A 退所後に地元で暮らす予定のさよこさんは、家族、孫娘の友人親子、民生委員・役所、友人、動植物、内縁の夫といったさまざまなパーツをもとに、今後の生活について構想していた。これらのさまざまなパーツは、その多くが再犯への不安の語りと結びついており、再犯をしないためのストッパー的役割だととらえていた。ただし、さまざまな「パーツ」を得たとしても、さよこさんが再犯しないとは限らない。

しかし、それぞれのパーツに対して、買い物への依頼、経済的な支援、カラオケなどの趣味といったさよこさんによる肯定的な意味づけがなされており、そのなかで家族は、あくまでパーツの一つにすぎないことが明らかとなった。また、家族との関係性以上に、自身の再犯に対する不安の方がはるかに大きいことが明らかになった。

従来の高齢の女性受刑者研究では、「『家族』に始まり『家族』に終わり、『家族』抜きには考えられない」そのうえで、「それだけに、家族との関係をどのように整理し、修復できるかが、最も重要であると思われる」（細井 2021:296）との指摘がなされてきた。だが、さよこさんのケースからしてみれば、かならずしもそうではないことが明らかになった。家族の存在が重視される状況であったとしても、そのなかからあらわれる、当事者がみずから選択する家族以外の関係性に目を向ける必要がある。

#### 【付記】

インタビュー調査にご協力いただいた、さよこさんと更生保護施設 A に心より感謝を申し上げます。

#### 【注】

- 1 インタビュー実施時期（202311、202312、202402）。
- 2 202311 インタビューデータより
- 3 202311 インタビューデータより
- 4 202311 インタビューデータより
- 5 202311 インタビューデータより
- 6 202402 インタビューデータより
- 7 さよこさんが受刑していた刑務所をさす。固有名詞が含まれるため【刑務所】表記とし、匿名化した。
- 8 202402 インタビューデータより
- 9 さよこさんの長女の氏名をさす。固有名詞が含まれるため【長女】表記とし、匿名化した。
- 10 さよこさんの次女の氏名をさす。固有名詞が含まれるため【次女】表記とし、匿名化した。
- 11 202312 インタビューデータより
- 12 202311 インタビューデータより
- 13 202402 インタビューデータより
- 14 遵守事項とは、保護観察対象者が遵守しなければならない事項のことをさす。遵守事項には2種類あり、対象者に共通して法律において定められているものを一般遵守事項、個々の対象者の事情に応じてその改善更生のために必要と認められる範囲内で具体的に定められているものを特別遵守事項という（守屋 2021:170）。
- 15 更生保護施設 A の規則のことをさす。たとえば、門限を守ること、他寮生との物品や金銭の授受をしないこと等がある。
- 16 202311 インタビューデータより
- 17 202312 インタビューデータより
- 18 202402 インタビューデータより
- 19 さよこさんの孫娘の友人親子の母親が勤めるスーパーの店舗名をさす。固有名詞が含まれるため【地元の大手スーパー】表記とし、匿名化した。

## 竹松 家族関係はどのように意味づけられるのか？

- 20 202311 インタビューデータより
- 21 202311 インタビューデータより
- 22 さよこさんが受刑前に付き合いのあった地元の友人の氏名をさす。固有名詞が含まれるため【友人】表記とし、匿名化した。
- 23 202312 インタビューデータより
- 24 さよこさんと内縁関係にある男性の氏名をさす。固有名詞が含まれるため【内縁の夫】表記とし、匿名化した。
- 25 202402 インタビューデータより
- 26 202311 インタビューデータより
- 27 202312 インタビューデータより
- 28 さよこさんが施設 A 退所後に生活する予定の地域名をさす。固有名詞が含まれるため【地元】表記とし、匿名化した。
- 29 202402 インタビューデータより
- 30 202402 インタビューデータより
- 31 202312 インタビューデータより

## 【文献】

- 藤野京子, 2020, 『罪を犯した女たち』金剛出版.
- 後藤弘子, 2022, 「ジェンダーのレンズで女性犯罪者を見る—「困りごと」を減らしていくために—」日本更生保護協会, 73 (7):13-19.
- 原淳一郎, 2021, 「更生保護施設」日本更生保護協会編, 『更生保護学事典』, 246.
- 法務省, 2024, 法務省ホームページ, (2024年12月1日取得, [https://www.moj.go.jp/hogol/kouseihogoshinkou/hogo\\_hogol0-01.html](https://www.moj.go.jp/hogol/kouseihogoshinkou/hogo_hogol0-01.html)).
- 細井洋子, 2021, 「高齢受刑者の実像と生活意識—「平成24年調査」、「インタビュー調査」、「自由記述調査」を通して—」細井洋子・辰野文理編, 『高齢者犯罪の総合的研究—社会保障、雇用、家族、高齢化を視野に比較文化的に考察する—』風間書房, 290-328.
- 守谷哲毅, 2021, 「一般遵守事項」日本更生保護協会編, 『更生保護学事典』, 170.
- 太田達也 2016, 「高齢者犯罪の実態と対策」青木省三・宮岡等・福田正人監修, 『こころの科学』日本評論社, 188:53-58.
- Rachel Shteri, 2011, *The Steal: Cultural History of Shoplifting*, Penguin Publishing Group. (黒川由美訳, 2012, 『万引きの文化史』太田出版.)
- 佐々木彩子, 2016, 「女性と犯罪」青木省三・宮岡等・福田正人監修, 『こころの科学』日本評論社, 188:47-52.

## How do family relationships interpreted ? : Focusing on the narratives of elderly female ex-prisoners

TAKEMATSU Miyuki

### Abstract:

Social isolation has been identified as one of the problems surrounding elderly prisoners. Turning to older female prisoners, they are often closely related to oppressive gender structures, such as experiences of violence and spells of gender norms. Prior research has pointed to the important implications for “family” of older female prisoners throughout the pre-release and post-release phases of their sentences. However, it has not been clarified how the meaning of “family” has changed for elderly female prisoners at each stage from pre- to post-incarceration. Based on this concern, the purpose of this paper was to clarify how the family is made meaningful to elderly female ex-prisoners based on their narratives about their family relationships from before to after their release from prison. The analysis revealed that family was only one of many relationships, and that anxiety about her own recidivism was far more significant than her relationship with her family.

Keywords: imprisonment experience, female inmate, elderly

## 家族関係はどのように意味づけられるのか？ ——高齢の元受刑者の女性の語りに着目して——

竹 松 未結希

### 要旨：

高齢受刑者をとりまく問題の一つに「社会的孤立」が指摘されている。女性の高齢受刑者に目を向けると、被暴力経験やジェンダー規範の呪縛といった抑圧的なジェンダー構造と密接に関わっている場合が多い。先行研究では、受刑前から出所後の段階をとおして、高齢の女性受刑者の「家族」に対する重要な意味づけが指摘されている。しかし、受刑前から出所後の各段階において、女性の高齢受刑者にとっての家族に対する意味づけがどのように変容したのか明らかにされてこなかった。こうした問題関心のもと、本稿は、高齢の元受刑者の女性の受刑前から出所後の家族関係にかんする語りをもとに、どのように家族が意味づけられているのかを明らかにすることを目的とした。分析の結果、家族の存在は、さまざまな関係性のなかの1つにすぎず、家族との関係性以上に、自身の再犯に対する不安の方がはるかに大きいことが明らかになった。